〔共同研究〕

『類雑集』の動物表現　その（1）―「蛇」にまつわる話を手がかりに―

近世唱導文芸研究会

一、はじめに

近世唱導文芸研究会では、大正大学図書館に所蔵される近世の唱導資料を研究対象としている。近年は、大正大学図書館蔵『類雑集』を研究対象として、出典研究を進めている。前号の中間報告では、『類雑集』巻八に引用された「一角仙人説話」をてがかりに、『類雑集』がどのような書物に影響をうけているのか、について若干の考察をくわえた。具体的には、「一角仙人」説話は、経典、注釈書、説話、和歌、能へと大きな広がりをみせる作品であるが、『類雑集』の「一角仙人譚」は、経典類からの引用を主としつつも、それ以外の書物の影響を考えたときに、『三国伝記』や『宝物集』にみられる同説話からの影響関係が考えられないか、という点について試論を述べた。ただし、『類雑集』の生成に関する書物の特定については、もう少し熟慮したいと思う。

さて、本稿は、『類雑集』の特徴を表現機構から考察する研究の一端である。本研究会のメンバーである北林茉莉代氏は、これまで、「敬語表現」や「注記表現」などに着目し、『類雑集』の表現の特徴

を報告してきた。本稿は、「動物表現」のうち、「蛇」に着目した。その目的は、『類雑集』において「蛇」は、どのような文脈のなかで、どのようなイメージで用いられ、どのような語と関連性があるのか、明らかにすることである。第二項では『類雑集』の「基礎的事項」を確認し、第三項では「蛇の用例」六十八例を整理する。第四項では用例中に見える「関連語」を整理し、とくに着目すべき語の定義を確認するとともに、使用された文脈に考察をくわえる。第五項では『類雑集』における「蛇」の用例をまとめ、第六項では、平安時代の『蜻蛉日記』において、作者が見た夢に出てくる「蛇」について考察された大場朗氏の指摘をまとめた。第七項では、『類雑集』と『蜻蛉日記』の「蛇」の用例の違い、すなわち平安時代から室町時代の「蛇」のもつ意味について整理した。

なお、本稿は、近世唱導文芸研究会メンバーの大正大学名誉教授大場朗先生にご助言いただき、研究会を代表して、第二項～第五項を北林茉莉代氏、第一項と第六項～第七項を平間尚子が執筆をした。

二、『類雑集』とは

『類雑集』は、近世初期成立と推定される唱導資料である。版本は二種あり、「慶安四年辛卯暦十月吉辰　石黒庄太夫板本」の刊記を持つもの（「慶安四年版」）と、後印本と考えられる「明暦三丁酉年三月吉辰寺町通圓福寺前町秋田屋平左衛門板行」の刊記を持つもの（「明暦三年版」）がある。ともに、十巻および目録一冊の、計十一冊からなる。

牧野和夫氏は、『類雑集』を以下のように説明する。

十巻を、門別に分かち、各門、「事」書にて項目を立て、諸書よりの引文を以て当てる。則ち、門別分類した要文集・要語集という性格をもつ。実用書の常として、諸書よりの抜抄に基づくもので、その引書は、天台三大部とその注釈書、「法苑珠林」等が主体をなしているが、外典・俗書の活用も認められる。(1)

各巻の「門」と「収録話数」は、つぎのとおりである。巻は□で、門は○で示した。

巻一　○六道門（三十二話）、○傍生（三十四話）、○人間（二十一話）、○天上（十八話）
巻二　○三乗門（三十四話）、○仏身門（三十八話）
巻三　○経法門（五十話）、○僧衣門（六十九話）
巻四　○修行門（三十六話）、○供養門（三十二話）、○屋舎門（二十八話）
巻五　○恩孝門（六十話）、○神祇門（五十六話）
巻六　○員数門（五十五話）、○字義門（七十六話）、○時節門（十八話）
巻七　○国土門（三十九話）、○草木門（二十三話）、○器財門（二十三話）、
　　○医薬門（三十五話）
巻八　○無常門（三十七話）、○不浄門（四話）、○苦患門（六話）、○愚惑門（三十二話）
巻九　○勧学門（四十四話）、○摂折門（十二話）、○雑語門（三十四話）
巻十　○含蔵門（三十七話）

約一〇〇〇にわたる説話は、各門のテーマに即して配置され、門ごとに通し番号で話数が振られて

いる。記事は、短いものは一行、長いものは数丁にわたる。

各話を詳細に検討すると、話数の直後に話の概略を「～事」に続く形で示している。改行後、冒頭に経典名を一～二文字程度の略称で示し、「云」以下に引用する。引用の終わりは、「也」「文」「云云」などで示されることが多い。その後、「同云」「又云」として同書の別の箇所を引くか、再度、別の「経典の略称」を示して、他の経典の類話を引く。頻出する経典は、『止観輔行傳弘決』『法苑珠林』『摩訶止観』『釋氏要覧』『法華文句記』『法華玄義釋籤』などで、略称はそれぞれ「弘」「法苑」「止観」「要覧」「記」「籤」である。経典の引用のみで終わる場合もあるが、つづけて注釈書や俗典の類を引く場合もある。漢籍では、『蒙求』『千字文』『論語』『事林広記』など、和書では、『万葉集』『枕草子』『宝物集』『沙石集』『十訓抄』『金葉和歌集』『俊頼髄脳』など、枚挙に暇がない。出典が不明である場合は、「有云」「或人云」のように、口伝として収載する傾向にある。注記表現として「可レ思レ之」や「委見タリ」など、読者への指示と取れるような表現がある。注記は多くの場合、「小字双行」で示される。

先行する研究では、主に出典考証が行われている。

牧野和夫氏は、

> 平安時代から室町末期近世初頭頃に到る各時代の成立の幅広い引書（孫引き等も考慮しなければならない）に基づく輯成である。注目すべきことは、主に小字双行の割注形式を以て示された「法華題目抄」「開目抄」「録外曾谷抄」「知謗法論」等の名であり、日蓮の著作類の引用が認められる点である。先に指摘した『類雑集』の刊・写本が日蓮宗内を中心に流伝していたと覚しい事実と符合して、『類雑集』刊行時に日蓮宗関係者が関与していたことは確実となったのである。

と、日蓮宗の関わりを指摘している。[2]

清水宥聖氏は、『類雑集』編者が閲覧していた『言泉集』は叡山文庫本系統」であると特定している。[3]

拙稿では、『類雑集』巻六「十二月ノ異名事」では『塵荊抄』に沿って配列し、基礎事項を示した後で『下学集』に拠って補記していること、[4]『類雑集』巻八「死苦事」に見える漢詩と和歌五首を『宝物集』の伝本十一種と比較した結果、『宝物集』第二種七巻本系統が最も近いことを報告している。[5]さらに、『類雑集』における三十四首の「和歌」をもとに出典考証を行い、『沙石集』は略本系、『金葉和歌集』は再撰二度本系統のうち精選本系または中間本系、『宝物集』は第二種七巻本系統のうち久遠寺本に属する伝本、『法華初心成仏抄』は朝師本と特定した。[6]

直近では、大正大学綜合佛教研究所近世唱導文芸研究会を代表して平間尚子氏が執筆を行った、『類雑集』巻八「術婆伽事」の出典に関する論考もある。[7]

そのほか、『類雑集』の表現に関して、『類雑集』約五〇〇例の「敬語表現」のうち、一五〇例が原拠に見られない独自の敬語表現であること、「僧」二十一例中十三例が日蓮および日蓮宗関係者への敬意であること、『八雲御抄』の「御」に「コ」と振るのは日蓮宗の慣習的な読みの影響であることなどを指摘した。[8]

三、「蛇」の用例

『類雑集』において「蛇（虵）」が確認できるのは、計六十八例、三十七話である。

本項では、巻数、門名、通し番号、話数、話題、概要を整理した。なお、各話の詳細と「蛇」の該当箇所については、紙幅の関係上すべてを掲載することは割愛するが、代表的なものを後述する【資料編】に掲載した。

【本文編】

巻一

○六道門

① 二十話「地獄事」…地獄の描写において、「毒」を吐く八万四千の「大蛇」が登場する。

② 二十七話「畜類有四生事」…出生の四形態のうち、卵生の例として「蚖蛇」が挙がる。

○傍生

③ 六話「龜毛兔角ノ在無ノ事」…実在しないものの喩えの一つとして、「蛇足」が挙がる。

④ 十七話「鴆鳥事」…毒鳥「鴆」は蛇を食すと説明される。この蛇は「毒蛇」を指すか。

⑤ 十九話「虵頭與レ尾爭事」…「瞋恚」の例として、一匹の蛇が頭と尾で争う話を挙げる。

⑥ 二十話「畜生變化スル事」…長い年月を経た動物が別のものに変化する例の一つとして、蛇が挙がる。

⑦ 二十三話「七歩蛇事」…蛇の「毒」性が強く、八歩に至らず、七歩で力尽きる話を記す。

⑧ 二十五話「龍受二三熱一阿耨池龍不レ受レ熱事」…阿耨達龍王（あのくだつりゅうおう）以外の諸龍は「三熱」を受け、「蛇身」を得ると記す。

⑨ 二十六話「鴿鳥蛇鹿雑談」…四種の禽獣が寄り合い、蛇は、世の中で最も苦しいものは「瞋恚」という「毒意」だと述べる。

巻二

○三乗門

⑩ 二話「身子瞋恚事」…身子（舎利弗）は前世「蛇」であったため、「瞋恚」に囚われる。

⑪ 十八話「槃特鈍根因縁事」…周利槃特は、「蛇奴」とも翻訳される。

⑫ 十九話「莎伽陀比丘飲酒戒ノ因縁事」…莎伽陀比丘と「悪龍」の神通力の描写のなかで、龍が「毒蛇」や蝮などを降らしたとする。

巻三

なし

巻四

○修行門

⑬ 三十二話「戒満事」…かつての釈迦「毒龍」が戒を受けて眠ると、「蛇」のような形状になり、猟

師に皮を剝がされる。

○屋舎門

⑭ 二十一話「五趣生死輪」…鳩は「貪」、蛇は「瞋」、猪は「痴」の象徴であると説かれる。

巻五

○神祇門

⑮ 三十一話「神ノ形皆蛇身也ト云事」…神が「蛇身」であるのは、日夜、衆生の「貪瞋痴」を吸うためであり、そのために「三熱」の「毒蛇」となることを説く。

⑯ 三十二話「蛇―神ノ誓願ニ信スル人ヲ堕ニス蛇道一ニ事」…諸神は「蛇身」であり、信じる人間は蛇道（死後、蛇身に生まれかわる世界）に堕ちるという。

⑰ 三十五話「蟻通明神事」…蟻通明神の説明のなかで、親に「蛇」の雌雄の判別方法を問うた話を挙げる。

⑱ 五十三話「犬神明神本跡事」…「大蛇」を食い殺した犬を祀ったのが犬神明神だという。

巻六

○時節門

⑲ 十一話「五節供事」…端午の節句の由来として、国から「毒蛇」を追い払うために、蛇に似た菖蒲を刻んだり、蛇の子に似た粽巻を食したりすると述べる。

巻七

○国土門

⑳　二十六話「北州事」…北州（北鬱単越）には「蚊虻蚖蛇悪獣」が存在しないと語られる。

○器財門

㉑　六話「驪龍頷下ノ珠ト云事」…大施太子が黒い「毒龍」の顎の下を探って珠を得る説話中に、「毒蛇」の語が見える。

㉒　十九話「笙之事」…笙を作った女媧の下半身は「蛇体」であると述べる。

○医薬門

㉓　十四話「蛇ノ影ノ移ルヲ呑テ病ル事」…死んだ蛇や絵画の蛇の影を映した盃を飲むことで、病を得たことを述べる。

巻八

○無常門

㉔　二十一話「無常要文等」…怨み、危害を加えることに親しむべきではないとしたうえで、比喩として、それは「毒蛇」が箱に入っているのと同じであると説く。

㉕　二十六話「隙行駒ノ事」…二鼠が走り、鳥が飛び、「四蛇」が争い、駒が通り過ぎる間に、無常の身は死に近づいているという。

㉖ 三十話「仁王経四非常偈事」…『仁王経』の偈のなかに「四蛇」が見える。
㉗ 三十二話「黒白鼠等事」…無常の喩えのなかで、黒白の鼠が樹を齧り、井戸の四辺を「四ノ毒蛇」が囲い、その井戸の下に「三ノ大毒竜」がいるという。
○苦患
㉘ 三話「苦―々壊―苦行―苦事」…人体は「四大」という四要素でできている。比喩として、それはまるで、「四蛇」が一つの箱に入っているのと同様であると述べる。
○愚惑門
㉙ 十一話「可二慎睡眠一事」…比喩として「毒蛇」と同室にいるのと同じであると説く。
㉚ 二十六話「誠二睡眠一事」…右に同じく、比喩として「毒蛇」と同室にいるのと同じであると説く。
㉛ 二十八話「妄語過罪事」…比喩として、妄語は口の中に「毒蛇」がある状態と同じであると説く。
㉜ 三十二話「依業報受悪身事」…臨終の際、邪見をおこすと悪道に堕ちる。淫欲が盛んな者は鳥類に、「瞋恚」が盛んな者は「蚖蝮蛇蠍」に、愚痴が盛んな者は猪等に生まれ変わる。

巻九 なし

巻十
○含蔵門
㉝ 十三話「棄老国事」…棄老の国で、二匹の蛇の雌雄を判別する方法を伝授される。
㉞ 十六話「仏供―二養玉フ法一ヲ所以ノ事」…偈中の比喩として、蛇の「蛇足」を知るが如くであると説

明される。

㉟ 十七話「嫌女人諸文事」…「刀火雷電霹靂怨家毒蛇」の類より、「女人ノ慳妬瞋諂妖穢鬪諍貪嫉」に近づくべきではないとする。

㊱ 二十三話「勧修之要文事」…伝教大師の要文中に、「四蛇」の語が登場する。

㊲ 二十七話「不殺生戒事」…殺生の十罪の四に、衆生が恐れることは蛇が寅を見るが如くであるとの比喩が見える。

四、関連語の分析

本項では「蛇」の「関連語」を挙げ、特徴を考察する。この「関連語」とは、「蛇」とともに「熟語や連語として使われる語」や、「話のテーマとして登場する語」を指すものとする。以下に、特徴的な語を十一項目挙げ、該当する説話の番号を示した。必要に応じて、「語の辞書的定義」や「本文」、「経典の記述」を確認し、文脈の理解に努める。

（1） 毒（蛇）　→①④⑦⑨⑩⑫⑮⑲㉑㉔㉗㉙㉚㉛㉟

（2） 蚖（蛇）　→②⑳㉜㉟

（3） 大（蛇）　→①⑱㉟

（4） 四蛇（四大）　→㉕㉖㉗㉘㊱

（5）瞋恚　→⑤⑨⑩⑭⑮㉜㉟
（6）怨　→⑲
（7）火（炎）　→①㉛
（8）龍（毒龍・悪龍）→⑧⑫⑬㉑
（9）三熱　→⑧⑮
（10）蛇身（蛇体）　→⑧⑮⑯㉒
（11）蛇足　→③㉞

右に示したとおり、「蛇」は（1）「毒」とともに使われる頻度が高い。①④⑦⑨⑩⑫⑮⑲㉑㉔㉗㉙㉚㉛㉟の話で「毒」の語が確認でき、そのうち多くは「毒蛇」という熟語である。また、同様の文脈で使われているのが、（2）「蚖」であり、②⑳㉜㉟の話で確認できる。なお、『大漢和辞典　デジタル版　十巻』（大修館書店）によれば、「蚖」一語の場合には「いもり」の可能性があるものの、「蚖蛇」と熟語の場合には「まむし」または、「蛇」であることが了解される。「まむし」は毒蛇であるため、（1）と（2）は、ほぼ同じ文脈で捉えることができる。

（3）「大」は①⑱㉟で確認でき、すべてが熟語である。文脈上は「蛇」だけで通じるが、巨大なものへの恐怖や、迫力を演出するために「大蛇」と形容したと考えられる。

（4）「四蛇（四大）」とは、『大漢和辞典　デジタル版　十巻』（大修館書店）によれば、蛇そのものではなく、「地・水・火・風」の四大要素を蛇に喩えた表現である。『類雑集』では、㉕㉖㉗㉘㊱の

ように、「無常」の喩えという文脈で使われている。

（5）「瞋恚」は、「いかりうらむ」ことであり、「三毒」の一つ、「十悪」の一つでもある。「蛇」は「瞋恚」の象徴であるとされる。この「関連語」はとくに重要であると考えられるため、「瞋恚」にまつわる話、具体的には⑤⑨⑩⑭⑮㉜㉟をとりあげて、該当本文の翻刻をつぎに掲載したい。なお、丸囲み数字で示した説話の通し番号は、前述した６ページから１１ページの番号と一致するものである。

【資料編】

⑤（『類雑集』巻一－十九話「蛇頭與レ尾爭事」）

十九 蛇頭與レ尾爭事

法苑七十八 十惡篇 瞋恚部 引雜譬喻經云昔シ有リ一ノ蛇ノ頭ト尾ト自ラ諍フ頭語テ尾ニ曰ク我ヲ應レ爲レ大ト尾語テ頭ニ曰ク我レヲ應レ爲レ大ト頭ノ曰ク我レニ有レ耳能ク聽ク有レ目能ク視ル有レ口能ク食ス行時ニ在リ前ニ故ニ可レ爲レ大汝ハ無ニ此ノ術ノ尾ノ曰我レ

*令ニ汝ヲ去ラ故ニ得ル去ルヲ耳若シ我レ不セン去ラ以テ身繞レ木ヲ三匝ノ三日不レ已ヤマ不レ得レ求ルニ食飢餓ノ垂レ死頭語テ尾ニ曰ク汝チ可シ放レ我ヲ聽ユルシ汝ヲ爲レ大ト尾聞テ其ノ言ヲ即時ニ放レ之ヲ復語テ尾ニ曰汝既ニ爲レ大ト聽ス汝ヲ前ニ行ク尾在テ前ニ行ク未タ緣ニ數歩ニ墮テ大深坑ニ而死ス喩下衆生無智ニシテ強ク爲ナレ人我ヲ終ニ墮ルニ三途ニ文

⑨（『類雑集』巻一－二十六話「鴿鳥蛇鹿雑談」）

」31オ

廿六 鴿烏蛇鹿雑談

同廿三云法句經偈云

熱ハ無シ過タルハ婬　毒ハ無シ過　怒　苦ハ無シ過　身　樂ハ無シ過　滅

佛説ル偈已テ告ニ諸比丘ニ往昔久遠無數世ノ時ニ有リ

五通ノ比丘ニ名ニ精進力ニ在山中樹下閑寂ニ求レ道

時ニ有テ四ノ禽獸ニ依ニ附シ左右ニ常ニ得ニ安穏ナルコヲ一者鴿二

者烏三者毒蛇四者鹿也是ノ四禽獸者晝ハ行チ求メ

レ食暮ハ　則チ還テ宿ス四ノ禽獸一夜アルヨ自ヲ相問テ言ク世間ノ之

苦何ニ者カ為スル重ト烏ノ言飢渇最モ苦也飢渇ノ之時ハ身羸カレ

目冥クラフ神識不レ寧シ投ケ身ヲ羅網ニ不レ顧ニ鋒刃ノ我等喪スヘ

レ身莫シ不レ由レ之以レ此言フニ之飢渇ヲ為レ苦ト鴿ノ言婬欲

最ノ苦也色欲熾盛ニシテ無レ所ニ顧念ニ危レ身滅ヲ命莫レ不レ由

レ之毒蛇ノ言瞋恚最ノ苦也毒意一クヒ起レバ不レ避ニ親疎ニ亦

能殺レ人復亦自殺鹿ノ言ク驚怖最ノ苦也我在ニ林野ニ

心常ニ□惕畏ニ懼獵師及諸犲狼ニ髣髴ホノカニ聞有レ聲奔ニ

投溝壑ニ母子相ヒ捐ステ肝膽掉悸以此言レ之驚怖ノ

為レ苦比丘聞レ之即答レ之曰ク汝ニ等所レ論是レ其ノ末

」35オ

」35ウ

耳不レ究ニ苦ノ本一天下之苦無過ニ有身一身ヲ爲ニ苦器一
憂畏無量ナリ吾レ以ノ是故ニ捨テ俗學ヲ道ヲ滅シ意斷シ想不
レ貪ニ四大一欲レ斷ニ苦源一志シ存スニ泥洹ヲ一是ノ故ニ知身ヲ爲ニ大
苦ノ本ト一故ニ書云ク大ナル患ヘ莫シ若ハ於ニ身ニ也文

⑩（『類雑集』巻二一二話　「身子瞋恚事」）

■身子瞋恚事

弘二十七身子生瞋者時羅云從佛經行佛
問羅云何爲羸瘦羅云以偈答佛若人食油
則得力若食蘇者得好色食麻滓菜無色力
大德世尊自當知佛問羅云是衆中誰爲上
座羅云答和上舍利弗佛言舍利弗食不淨
食時舍利弗轉聞是語即時吐出食作是誓
言我自我今日不復受請時波斯匿王須達多
等詣身子所佛不以無事受請今不受請我
等云何得清淨信身子述佛所訶語王王白
佛佛勅還受請猶故不受佛言是人心堅不
可復轉昔曾爲蛇害國王醫收令嗽毒若不
我嗽者即須入火思之曰我毒以放云何更嗽
乍入火死以由善惡不相妨故得極果猶
有於惡

」1ウ

」2オ

⑭（『類雑集』巻四-二十一話「五趣生死輪」）

廿一 五趣生死輪

又云根本毘奈耶律第三十四卷云佛在王
舍城羯蘭鐸迦池竹園中時大目乾連於時
中往五道慈愍觀察至捺洛迦（地獄也此云無喜樂）見
諸有情受種種苦於四衆中普皆宣告阿難
陀言非一切時處嘗有目連今勅諸苾芻於
寺門壁畫生死輪應隨大小圓作輪形中安
轂次安五輻表五趣當轂下畫地獄二邊畫
傍生餓鬼次上畫人天於人趣中唯畫四洲
於其轂上塗白色中畫佛佛前畫三類物初
畫鴿表多貪次畫蛇表多嗔後畫猪表愚癡
於網處應作漑灌像多安水罐中畫有情生
死之像生者於罐出頭死者出足於其五趣

」56ウ

各像其形應畫十二支生滅之相無明支作二
羅刹像一行支作二陶家輪像識支作二獼猴像一名
色支作二人乘船像一六處支作二六根像一觸支作二
男女撫像一受支作二男女受苦樂像一*受支作二女
人抱男女像一取支作二丈夫汲井像一有支作二大
梵王像一生支作二女人誕孕像一老*支作二男女衰老
像一病作二病像一死支作二死像一憂作二男女憂慼像
悲作二啼哭像一苦作二男女受苦像一惱作二丈夫挽
難調駱駝像一其輪頂應レ畫無常大鬼髻髻張
レ口長舒二兩手一*抱二其網一於鬼頭兩畔一書二伽他
一曰汝當求出離。於佛教勤修降二伏生死軍一
レ如二象一摧二草舍一二曰於二此法律中一常二爲不放逸一
能竭二煩惱海一當レ盡苦邊際一次於二鬼頭上一畫二一
白圓壇相一表二涅槃圓淨之像一号爲二五趣生死
輪一文

57オ

⑮（『類雑集』巻五―三十一話「神ノ形皆蛇身也ト云事」）

卅一 神ノ形皆蛇身也ト云事

神道秘典ノ口傳云神ハ本地佛ニテ在セトモ法界ノ衆生日夜朝暮起ニ貪嗔癡三毒ヲ神ノ慈悲イミシクメ日ニ三度夜ニ三度鳥居ノ上ヘニ上リテ衆生ノ愛欲煩惱ヲ吸ヒカ即三熱ノ毒蛇ト顕シヲ也ニテ云

㉜（『類雑集』巻八-三十二話「依業報受悪身事」）

冊二依業報受悪身事

法苑九十七ニ倶舎論ニ云ク若シ人ト臨ー終ニ起ニ邪ー見ノ心ヲ
是ノ人以テ先ノ不ー善ヲ為レ因ト邪ー見ヲ為レ縁故ニ堕ニ地獄ー有ル
論ー師ノ言ク一ー切ノ不ー善皆ー是地ー獄ノ因也此ノ不ー善ノ之余
生ニ畜ー生餓ー鬼ノ中ニ又タ法業盛ナル故ニハ堕ニ畜生ノ中ー如ニ姪ー
慾盛ナル故ニハ生ニ於鴿雀鴛鴦ノ之中ニ瞋ー恚盛ナル故ニハ生ニ於
蚖蝮蛇蠍ノ中ニ愚ー癡盛ナル故ニ生ニ猪羊蚌蛤ニ*憍ー慢盛ナル
故ニ生ニ於師子虎狼ノ中ニ掉ー戯盛ナル故ニ生ニ獼猴ノ中ニ慳ー
嫉盛ナル故ニハ生ニ餓狗ノ中ー若シ有ルハ少ー分施ー善ノ余ー福ー雖レ生ニ
畜ー生ー於レ中微ン楽ニ身ー口ノ二ー業ヲ雖ニ由レ心為レ主ー然モ其ノ
口ー業受レ報者ノ多ク*加ニ罵人軽躁ー喩ハ如獼猴即生ニ
猴中ー若言貪ー悋如レ烏語如ニ狗吠ノ駮如ニ猪羊ノ声
如ニ驢鳴ノ行如ニ*駏駝ー自高如レ象悪如ニ逸牛ノ姪如ニ

」60ウ

㉟（『類雑集』巻十―十七話「嫌女人諸文事」）

十七 嫌女人諸文事

法苑珠林七十一（欲蓋篇 五欲部）引*大智度論云菩

薩観ルニ種種ノ不浄ヲ於ニ諸衰ノ中ニ女衰最モ重シ刀火雷

電霹靂怨家毒蛇之属（タクヒ）猶ヲ可シ暫ク近（チカツク）ニ女人ノ慳妬（ト）

瞋諂妖穢闘諍貪嫉不レ可ニ親近一何ヲ以ノ故ニ女子

小人ハ心浅ク智薄ノ唯タ欲ニ是レ親一不レ観ニ富貴智徳名

聞一専ラ行シ欲悪ヲ破スニ人ノ善根ヲ桎梏（シツコク）枷鎖閉繋囹圄（レイゴ）

雖レ曰レ難レ解猶一尚ヲ易シレ開女鎖繋レ人染*着ノ根深シ無

レ可レ得レ脱衆病最重シ如ニ仏偈ヲ以言一

寧ヲ以ニ熱鉄一　跪ニ転眼中ニ一　不レ以染心一　邪マニ視中女色上

含笑ノ作レ姿　憍慢*着想ニノ　*廻ノ面囁即レ眼　美言妬（ト）瞋

」23ウ

行歩妖穢　以テ惑ニ於人一　婬羅*欲網ニ　人皆ナ没レ身ヲ
坐臥行立　*廻レ盻巧媚　薄智ノ愚人　為レニ之ヤ所レ酔ヨハ
執テ剣向テ敵　是レ猶ヨ可シ勝　女賊ノ害スル人ヲ　是レヲ不レ可レ禁
蚖蛇含レ毒ヲ　猶可ニ手ヲ以捉一　女情惑レ人　是不レ可レ触

」24オ

有智ノ之人ハ　所レ不レ応レ視　若欲ハ、観レント之　当レ如ニ母姉ノ一
諦視ニ観之一　不浄填ミチ積　婬火不レ除　為レ之カ焼滅

「瞋恚」と「蛇」を結びつける重要経典が、『理趣経』である。つぎの傍線部について、大場朗氏は、「密教教理上の要文となっており、以後諸書に引用される」と指摘する。(9)

応建立曼荼羅。中央画観自在菩薩。如本儀形、前安金剛法、右安金剛利、左安金剛因、後安金剛語。於四内外隅、各安四内外供養。於東門画天女形、表貪慾。南門画蛇形表嗔。西門画猪形表癡。北門画蓮華形表涅槃。得入此輪壇、至無上菩提、一切諸惑皆不得染汚。(『大正新修大蔵経』巻一九、六一二頁、a29～b6)

まさに曼荼羅を建立すべし。中央に観自在菩薩を画け。本の儀形の如く、前に金剛法を安んじ、右に金剛利を安んじ、左に金剛因を安んじ、後に金剛語を安んず。四の内外の隅に各々四の内外の供養を安んず。東門に天女形を画き、貪慾を表す。南門に蛇形を画き、瞋を表わす。西門に猪形を画き、癡を表わす。北門に蓮華形を画き、涅槃を表わす。この輪壇に入ることを得て、無上の菩提に

至り、一切の諸惑、皆、染汚することを得ず。（『理趣経釈』（宮坂宥勝訳注『密教経典』講談社学術文庫2062、講談社、二〇一一年七月、399～400頁）

さらに、（5）「瞋恚」と同様に使われるのが（6）「怨」で、つぎに掲載する⑲の本文が該当する。「瞋恚」に「怨む」意味が内包されていることから、（5）と（6）は同義と考えてよいであろう。

⑲（『類雑集』巻六-十一話「五節供事」）

十一 五節供事 」53オ

用之也　五月五日菖蒲事混明池一寸内
百節菖蒲此根衆病ノ薬也依之非百節用
之祝也又昔有国王一臣流罪舎怨成毒蛇
滅国国王求治術義有智臣申彼ノ蛇ノ形頭赤
身青似彼菖蒲ノ根キサミ頭ユヒ腰マトヒ屋フキ
様様加対治体成其蛇怖畏ノ不来国太平也
又粽巻事彼蛇ノ子似其子取食体也　菖蒲
アヤメト云彼ノ蛇ノ名也　五月五日薬日云事
此日一切ノ草取薬用也其故病五月発事温
氣諸毒虫毒鳥毒蛇毒獣ノ力得気吐人類令
」54ウ

レ損也然ニモ五月五日ニハ此毒虫等毒気不レ出日也
依之一切草取テ薬トスル也　七月七日素麺ノ事
事ハ王母カ齢ヲ祝心也五月五日粽ハモトトリ也菖蒲ハ
ニモキクス玉寿命祭ノ意也其外略之私云五節供事口師
録外ノ抄ニ曽谷殿ノ宮ノ被遊也可捧
之五節者妙法等ノ五字也」

」56ウ

なお、「瞋恚」から連想される語として（7）「火（炎）」があり、この語を含む説話が①㉛に確認できるが、『類雑集』においては直接「瞋恚」と関わる文脈ではない。

（8）「龍（毒龍・悪龍）」が用いられる例話として、⑧⑫⑬㉑が挙げられる。

また、蛇や龍の苦しみとして挙げられるのが（9）「三熱」であり、この説明に紙幅を割いたのが⑧である。『日本佛教語辞典』によれば、「三熱」とは、「龍蛇が受ける三種の激しい苦悩」で、「一は、熱風熱砂で身を焼かれる苦しみ。二は、暴風のために居所などを失う苦しみ。三は、金翅鳥に捕えられ食われる苦しみ。」とある。

⑮には三熱の仔細はないが、神が人の「貪瞋痴」を吸い取ったがために「蛇身」となり、「邪身」となったがゆえに「三熱」を受けると因果関係が示されている。

⑧（『類雑集』巻一-二十五話「龍受二三熱一阿耨池龍不レ受レ熱事」）

廿五 龍受二三熱一阿耨池龍不レ受レ熱事

法苑七十二 四生篇相摂部 樓炭經云天下ノ諸龍ノ以二
三熱一見レ燒カ阿耨達ノ龍王ハ不レ以二三熱見上レ燒二ハ餘ノ
龍王ハ熱沙雨チ二身ノ上一燒炙ノ甚タ痛ム二ニハ餘ノ龍王ハ起二姪
相一向二熱風ノ來ツ吹ク一其身ノ上焦カレテ即チ失二顏色一得二蛇身一 ― 34ウ
便チ恐レテ不レ喜ハ三餘ノ龍王ハ被二金翅鳥食セ悉一皆恐怖ス
天下ノ餘龍ハ悉ク見二毒熱セ唯ク阿耨達ノ龍王ノ獨リ不レ見
レ熱文

（10）「蛇身（蛇体）」の語が用いられるのは⑧⑮⑯㉒で、蛇以外の龍や神の体を表す語として用いられる。

（11）「蛇足」は③㉞に見え、いずれも比喩として用いられる。

本項では「蛇」ともに使われている「関連語」を十一項目取りあげ、適宜、「定義」「本文」「経典」などを参照しつつ、文脈を押さえた。

五、小結

本稿の目的は、『類雑集』において「蛇」がどのようなコンテクストのなかで用いられ、どのようなイメージを有しているのか、また、どのような「関連語」とともに用いられているのか、明らかにすることであった。

そのために、『類雑集』の「基礎的事項」を確認した。『類雑集』十巻の構成や収録話数を一覧表にまとめ、約一〇〇〇話の例話が門ごとに配列されていることや、各話の記述の法則などを報告した。先行研究では、引用書のうち幾つかの文献が伝本レベルまで特定されていることを確認した。

つぎに、「蛇」の用例、計六十八例、計三十七話を整理した。この三十七話の翻刻は、近世唱導文芸研究会が報告した翻刻をもとに、紙幅の関係上、代表的なものを第四項【資料編】に掲出した。また、第三項の【本文編】では、各話の概要を一、二行程度にまとめた。その際、どのような話のなかで、どのような関連語とともに使われているのか記載した。

さらに、「関連語」を十一項目挙げ、「その語を含む説話の番号」「定義」「本文」「経典」などを確認した。その結果、最も「蛇」と関連性があるのは「毒（蛇）」、それと同義語だと考えられるのは「蚖（蛇）」、強調表現として用いられる「大（蛇）」、仏教語で四大要素を表す「四蛇（四大）」、同じく仏教語で自分の心に逆らうものを怒り恨む「瞋恚（瞋）」、その同義語と考えられる「怨」、「瞋恚」とは関係のない文脈で用いられる「火（炎）」、蛇と似た形であることを示す「龍（毒龍・悪龍）」、龍蛇が受ける三つの苦として「三熱」、蛇以外のものが蛇の形状になったときに使われる「蛇身（蛇体）」、比

喩として使われる「蛇足」など、一定の法則性があることが判明した。

今回は、「動物表現」のなかの「蛇」のみを取りあげたため、中間報告的な位置づけの発表となった。今後は、「蛇以外の動物表現」、とりわけ、「貪」を象徴する「鳩」、「痴」を象徴する「猪」などの調査・分析を行い、「三毒」それぞれのイメージや特徴を考察したい。その後は、さらに枠を広げ、『類雑集』における「比喩表現」として報告したいと考えている。

六、『蜻蛉日記』における蛇の用例

ここまで、『類雑集』におけるさまざまな「蛇」の用例を確認してきたが、『類雑集』以外の仏教文学における「蛇」は、どのように描かれてきたのであろうか。いまここに取り上げる平安時代の『蜻蛉日記』の一場面は、『蜻蛉日記』作者が、長精進を二十日行った際にみた夢の内容で、「頭をとりおろして額を分く」、また「わが腹のうちなる蛇ありきて肝を食む、これを治せむやうは、面に水なむいるべき」というものである。

二十日ばかり行ひたる夢に、わが頭をとりおろして、額を分くと見る。悪し善しもえ知らず。七八日ばかりありて、わが腹のうちなる蛇ありきて肝を食む、これを治せむやうは、面に水なむいるべきと見る。これも悪し善しも知らねど、かく記しおくやうは、かかる身の果てを見聞かむ人、

夢をも仏をも用ゐるべしや、用ゐるまじやと、定めよとなり。(10)

この二つの夢について、大場朗氏は、前者の夢は、尼姿であり出家を意味し、後者の夢については、蛇と真言密教の思想信仰に着目し、私見を述べられている。重要な指摘を含むので、長文ではあるが、ここに引用をしておきたい。

はじめに「蛇」に関する用例を、真言密教の文献に求めてみると、次のような重要経典が注目されるのである。即ち、不空訳『大楽金剛不空真実三摩耶経般若波羅密多理趣経』（理趣経）である。

（中略）さて、その『理趣経』であるが、同経は同じく不空が訳した『大楽金剛不空真実三摩耶経般若波羅密多理趣経釈』（理趣釈、理趣釈経とも）を以て解釈することになっている。その『理趣釈』に、次のような興味深いくだりがある。即ち、

この故に仏、「金剛手」に告げて言わく、「もしこの理趣を聞いて、受持し読誦し作意し思惟することあらば、設い諸の欲に住すとも、猶し蓮花の客塵の諸の垢のために染せられざるが如く、疾く無上正等菩提を証すべし」とは、修行者は観自在菩薩の心真言を持して、般若理趣を成就せんことを欲求す。まさに曼荼羅を建立すべし。中央に観自在菩薩を画け。本の儀形の如く、前に金剛法を安んじ、右に金剛利を安じ、左に金剛因を安んじ、後に金剛語を安んず。四の内外の隅に各々四の内外の供養を安んず。東門に天女形を画き、貪慾を表わす、南門に蛇形を画き、瞋を表わす。西門に猪形を画き、癡を表わす。北門に蓮華形を画き、涅槃を表わす。この輪壇に入ることを得て、無上の菩提に至り、一切の諸惑、皆、染汚することを得ず。

という有名なくだりである。密教教理の要文となっており、以後諸書に引用されるところとなっている。さて、ここで注目したいのは、引用文中に「設い諸の欲に住すとも、猶し蓮華の客塵の諸の垢のために染せられざるが如く」とあり、また「この輪壇に入ることを得て、無上の菩提に至り、一切の諸惑、皆、染汚することを得ず」とあることから理趣の実践により、三毒（貪瞋痴）から染汚されないことを明記している点である。これによって、実践者は三毒から解放され浄化されることになる。（中略）

言うところの内容を簡単におさえると、ここには、『理趣経』に説かれた仏の教えに従って修行者が実践すると無上菩提に至る方途が示されている、といえよう。さて、その方途であるが、『理趣釈』は、曼荼羅を描くのがよい、としている。具体的には、中央に観自在菩薩（観音菩薩）を描き、東南北西の四門にそれぞれ天女形、蛇形、猪形、蓮華形を描く。そして、それぞれの「形」は貪慾、瞋、癡、涅槃を表わすとしている。

以上の事柄を踏まえ、大場氏は、「蛇」に「瞋」が配されていることと、蛇を含む観自在菩薩理趣会曼荼羅を日々の修行で観想することで、蜻蛉日記作者の深層に蛇のイメージが瞋恚を伴って刷り込まれていたことを指摘されている。また、『蜻蛉日記』の「蛇の夢」については、

長精進における行法の積み重ねによって、『理趣経』の要理「観照の法門」（観自在菩薩理趣会曼荼羅の観想）の教え、即ち、蛇で表象される瞋恚が、仏道修行や菩提の成就を妨げる最大の煩悩であるという教説を知り、それが要因となって就寝中に「わが腹のうちなる蛇ありきて肝を食む」という夢を生成した、といえよう。

と述べている。

大場氏の御指摘は、平安時代の女流作家で『蜻蛉日記』作者の菅原孝標女は、密教の詳細な知識を有していること、またその知識が、経典を読んで理解した範囲にとどまらず、密教の行の実践が伴ったものであることを示している。それゆえ、『蜻蛉日記』の夢の内容は、彼女の仏教の知識と実践をもととして描写されているため、密教の知識がないと正確に読み解くことができない。翻って、平安時代には、「蛇」は、「瞋恚」の象徴であるという『理趣経』の思想が享受されていた事実と、その思想が、『類雑集』に至るまで、脈々と伝わっていることが浮かびあがってくるのである。

七、おわりに

ここまで、『類雑集』における「蛇」の用例と、『蜻蛉日記』における「蛇」の用例を確認した。本来であれば、経典や仏教文学作品における「蛇」の用例を総合的に精査し、『類雑集』と比較検討をした結果をまとめることを試みたのであるが、紙幅の関係もあり、続編は次号に掲載したい。

今ここで、本稿の要点をまとめておきたい。北林茉莉代氏は、『類雑集』において「蛇（虵）」の用例として、「熟語や連語として使われる語」や「話のテーマとして登場する語」を分析し、その特徴からつぎの十一項目に分析した。（1）毒（蛇）（2）蚖（3）大蛇（4）四蛇（四大）（5）瞋恚（6）怨（7）火（炎）（8）龍（毒龍・悪龍）（9）三熱（10）蛇身（蛇体）（11）蛇足である。それぞれの

用例は、第三項で述べたので、ここでは、代表的なものだけを取り上げたい。

（1）（2）「蛇」「蚖」は「毒」とともに使われる頻度が高く、多くが「毒蛇」という熟語で使用されている。

（3）「大蛇」は、巨大なものへの恐怖や迫力を演出するために「大蛇」と形容したと考えられる。

（4）「四虵（四大）」は「地・水・火・風」の四大要素を蛇に喩えた表現で『類雑集』においては、「無常」の喩えの文脈で用いられている。

（5）「蛇」は「瞋恚」の象徴であることが示され、「瞋恚」と同様の用例が（6）「怨」である。また「瞋恚」から連想される語として（7）「火（炎）」がある。ただし、『類雑集』においては直接「瞋恚」と関わる文脈ではない。

（10）「蛇身（蛇体）」の表現は、蛇以外の龍や神の体を表す語として用いられる。

（11）「蛇足」は二例あり、いずれも比喩として用いられている。

以上のことから、『類雑集』では、「毒蛇」の表現が多く用いられ「瞋恚」や「怨」といった用例が、確認できた。一方で、「四虵（四大）」のように「無常」の喩えであったり、「蛇身（蛇体）」のように、龍や神の体を表現する場合も確認できた。

また、大場氏の『蜻蛉日記』の「蛇」の夢には、日記作者の体験している仏道修行、すなわち真言密教の思想信仰が表現されたもので、三毒の一つ、「瞋恚」は、「蛇」として観想されており、作者の夢の表現にも用いられていることがわかるのである。今回は取り上げることができなかったが、「毒蛇」とは異なり、仏道修行における良き験としての「くちなは」も、文学作品には確認できる。『類雑集』

の生成を知るうえでも、それ以前の用例を精査してさらに考察をくわえていきたい。

【謝辞】本稿の第二項～第五項は、JSPS 科研費 JP17K13395（研究課題名「『類雑集』から見る近世唱導の生成と展開」）の助成を受けたものである。

注

(1) 牧野和夫『中世説話の説話と学問』（和泉書院、一九九一年十二月）180頁。
(2) 注(1)に同じ。
(3) 清水宥聖「『言泉集』と『類雑集』」（『国文学踏査』第二十号、大正大学国文学会、二〇〇八年三月）
(4) 北林茉莉代「慶安四年版『類雑集』巻六「時節門」出典考――第十七話「十二月ノ異名事」を中心に――」（『国文学試論』第二十五号、大正大学国文学会、二〇一六年三月）
(5) 北林茉莉代「『類雑集』における『宝物集』受容」（『国文学試論』第二十五号、大正大学国文学会、二〇一六年三月）

(6) 北林茉莉代「『類雑集』の和歌にみる編纂意識」（『国文学踏査』第二十九号、大正大学国文学会、二〇一八年三月）

(7) 近世唱導文芸研究会「〔共同研究〕『類雑集』の出典　その（1）――「術婆伽説話」を手がかりに――」（『大正大学綜合佛教研究所年報』第四十三号、二〇二一年三月）

平間尚子「術婆伽説話の生成と展開――恋は病か、破戒か、神を招くか」『宗教芸能としての能楽』（勉誠出版、アジア遊学二六五号、二〇二二年）

(8) 北林茉莉代「『類雑集』表現考（一）――敬語表現の用例から――」（『大正大学大学院研究論集』第四十三号、大正大学国文学会、二〇一九年三月）

(9) 大場朗「『蜻蛉日記』と密教――「菩提かなへたまへとぞ行ふままに」から「蛇と水の夢」へ――」（『中古文学』第一〇八号、二〇二一年十一月）では、引用した諸書として、『法華経開題』『理趣釈重釈記』『行林抄』『開心抄』『薄草子口決』『秘鈔問答』を挙げるとともに、平安時代文学のなかで『理趣経』の名前が確認できるものとして、『うつほ物語』『梁塵秘抄』を挙げる。

(10)『蜻蛉日記』（『日本古典文学全集』十三、小学館、一九九五年）二二三頁。